太平洋戦争末期の陸軍衛生事情
（第二報　患者発生の状況について）

清水勝嘉[※1]・三宅雅史[※2]

陸軍の疾病に関する統計表は医務局衛生課によって軍医団雑誌のなかにいくつか示されている。その統計表の期間は明治九年から昭和八年まで、対象は花柳病（性病）、外傷及不慮、脚気、赤痢、腸チフス、胸膜炎、肺結核である。

ここでは前報と同じ資料である「日本武装軍ノ健康ニ関スル報告」を用い、昭和十九、二十年の各種疾患の患者発生の状況を知り、太平洋戦争末期の軍隊内疾病の解明の一助としたい。

一般患者発生ノ状況

一九四四年ニ於ケル新患総数ハ九九、九四三ニシテ毎日ノ発生率ハ概ネ四・五％ニ相当ス

本年五月迄ノ新患総数ハ五六、七四八ニシテ発生率ハ略々前年度ト同様ナリ

又人員毎千平均一日現在患者ハ一九四四年ニ於テハ平均四四・三（最高京都師団六四、最低弘前師団二八）ナリ尚人員千ニ対スル平均一日発生率ハ一・九ナリ本年五月迄ノ成績モ亦略々同様ナリト推定セラル　一般ニ部隊発生患者中入院ヲ要スルモノハ概ネ二〇％程度ナリ

この患者というのは特にことわってはないが、陸軍省統計年表で用いられている「陸軍各部隊営内居住ノ下士官兵、教育召集中ノ補充兵及諸生徒ノ事実ニシテ練兵休、乗馬休以上ノモノ」を指していると思われる。

平均一日千に対する患者を昭和九年でみると、二八・七であったので、十九年のそれは著しく増加していることがわかった。

当時の主要疾患であった「結核性疾患ハ一九四〇年ニ五一・〇‰ヲ最高トシ漸減ノ傾向ヲ辿リ一九四四年ハ二四・〇‰ナリ一般ニ胸膜炎ハ著明ナル減少ヲ示シアリ」となっていた。

昭和十九年度の性病患者の発生は五、二六二名で、うち淋病が三、一一五名（五九・二％）と最多であり、次いで梅毒一、四七〇名（二七・九％）、軟性下疳六二〇名（一一・

八%）および第四性病五七名（一・一%）であった。

伝染病発生ノ状況

国内ニ於ケル陸軍部隊ノ伝染病ノ発生状況ハ昭和十九年度九、七六三名、昭和二十年度ハ六月迄ニ一一、四二六名ナリ　患者発生率ヲ真性ノミニ就テ見ルニ左ノ如ク昭和十九年度以降急激ニ増加セリ

	兵員一万ニ付発生率
昭和十八年	四四・五
昭和十九年	七二・八
昭和二十年	五五・二（六月迄トス）

病類別ニ見ルトキハ最モ多キハA型パラチフス」ニシテ伝染病総数ノ約半数ヲ占メム

赤痢ハ本年春季以降漸次各地ニ多発シ特ニ最近ハ九州地方ニ多シ　又各戦災都市ニ於テ非衛生ナル生活ニ基因シ相当数ノ発生ヲ見タリ

発疹チフス」ハ大陸ヨリノ主トシテ労務者ニ依リ病毒ヲ輸入シ昨年度ハ地方側ニ於テ四千名ニ及フ発生率ヲ見タルモ本年度ハ少シク減少セリ

民間の発疹チフスの発生は昭和十八年より増加し、昭和十九年は三、九四一名の患者と六二二名の死者をだしている。この全患者の半数強は北海道で発生している。

入院患者ノ状況

本年八月十五日現在ニ於ケル入院患者ノ状況ハ約八万ニシテ之カ内訳ハ次ノ如シ

イ、内地発生患者　七五%

ロ、還送戦病患者　二〇%

ハ、還送戦傷患者　五%　外地患者　二五%

以上ノ中主ナルモノ次ノ如シ

結核性疾患	三五%
消化器疾患	二〇%
伝染病	一五%
外傷不慮	一五%
戦傷	一〇%
ソノ他	五%

結核性疾患ノ転帰

治癒	三三・五%	死亡	三・一%
除役	二三・七%	事故	三七・二%

結核性疾患ノ治療日数

	陸軍病院	傷痍軍人療養所入所患者
肺結核	三―六ケ月	一年半
ソノ他ノ結核	三―六ケ月	六ケ月
胸膜炎	三―四ケ月	六ケ月

以上、主に昭和十九・二十年における陸軍内地部隊の一般患者、伝染病発生の状況および入院患者の概要について報告した。

※1)（防衛医科大学校公衆衛生学）
※2)（海上自衛隊）

永井潜と性教育

江川義雄

現代は性解放・自由化の時代となり、性をめぐる諸問題は、医学分野のみならず、大きい社会問題になりつゝある。

この時期に、明治・大正・昭和の三代にわたり、性医学のパイオニヤとして活躍した永井潜の業績にふれ、あわせて日本の現状についても言及したい。

永井潜は一八七六年（明治九年）十一月十四日、竹原市に出生し、十三名の兄弟の次男である。幼児より秀敏であり、九才にして漢学塾・凌明館に入り、神童と評せられた。後に広島県立師範学校附属小学校に転じ、次いで福山市の尋常中学誠之館に進み、その卒業成績優秀であったので、一年間ドイツ語を専修して、一高三部に無試験入学した。医科大学は当時としては東大のみであったが、明治三十五年東大医科を卒業した。卒業後、東大生理学教室に入